

37駒目のフィルムに写したもの 私家版・近江鉄道写真集 撮影エピソード

安藤 紳次

■列車は郷愁そして哀感

“何才以上の人”と問われ、ば即答できないが、ある年令以上の人は鉄道風景、といっても15分に一度やって来る都会の列車ではなく、1時間に一本しかない列車がホームに近づく待ちわびた分だけ懐かしさを感じる。またテールランプが遠ざかる夜景は独特の哀愁があり、切ない別離を思い出す。

“人生は出会いと別れの積み重ね”赤いランプはそんな伝言を残し夜のむこうへ消えてゆく。

■カメラは重い、しかし苦にならず

私はフィルムカメラとマニュアルレンズで近江鉄道を撮り写真集として平成19年に自費出版した。デジタルを使わない理由を説明すれば長くなるので省略。フィルムカメラ2台に交換レンズ5本、そしてフィルム等をバッグに詰めると約10kg、それをキャリーに乗せ現場へ向かう。但し自宅からの出発が午前5時過ぎなので、前日には準備を整える。

フィルムの外にバッグに入れるのは近江鉄道の時刻表、地図、方位を測る磁石等である。眠い目をこすりながら現場へ到着、といっても直ちに写すわけではない。事前に車中から撮影現場の確認をする。その為に予定した撮影場所に近づくと運転席のすぐ後ろの硝子越

しに前方を注視し、これなら写真になると決断したら次の駅で降りて、今通過した現場に戻るか反対側の電車に乗って一駅戻る、いずれにしても歩いて現場に辿り着くのである。私は自動車免許を持ってないので移動は公共交通機関か徒歩しかない。今回の写真集では意識して徒歩でしか接近できない場所で撮影した写真を優先的に選んだ。そうしないと自動車で移動している人に写真内容で負けてしまう。加えて自動車が使えない弱みは、深夜の風景がとれない事である。終電車の時間をこえてまで撮影ができない。だから、この写真集で夜の風景といえば裏表紙一枚だけである。さらにもうひとつ、10キロもある撮影道具の移動ならキャリーより自動車が有利である。しかし「感動する写真を撮る」という決意を心の中で繰返しながら1枚、そして次の1枚とチャンスをねらいながらの前進だから読者が想像されるほど苦にならない。

話を車内に戻すと、車中から見える風景と同一場所を線路際から見てもその風景は一致しない。当然だが、車中からの風景は自分の乗っている電車の外側は正確に見えないばかりか、両者の目の位置は3mぐらいの高低差がある。要するに眺望がまったく違うのである。どちらかと言えば車中からの風景が線路際より美しい。このような差をうめるのに私が意識していた事は撮影の当日より前、あらかじめ、ある種のイメージをもって撮影ポイントを探しておいた。つまり、あの鉄橋なら、この時間、このアングルがいい。雪が降ったらあの場所なら写真的に再現しやすい等を心の中で展開していった。

時折、偶然に見た素晴らしい場面もあった。しかし何の感動もない写真となるのは天気も時間も意識せずカメラ片手に何となく現場へ行った時である。目標・目的が曖昧だと、それが写真に出て他人どころか自分すら納得できない写真を創ってしまう。